

スリランカ女性の教育と労働 —その現状と課題—

Women's Education and Labor in Sri Lanka: Current State and Tasks

服部 範子* 黒川 衣代**
HATTORI Noriko KUROKAWA Kinuyo

スリランカは南アジアの他諸国と同様、発展途上国であるが、南アジア諸国の中では例外的に教育が推進され、識字率・就学率は男女とも100%に近く、ジェンダー差がほとんどみられない。全人口に女性の占める割合は男性よりも多く、平均寿命も南アジアの周辺諸国よりも約10歳も長い。

本研究では、このようなスリランカ女性の教育や社会生活の状況について、その現状や問題点を明らかにする。

スリランカでは非識字者を完全に根絶するため、すべての国民は義務教育を受けることが憲法に定められている。教育は小学校から大学まで無償で男女平等に保障されているが、大半の人々は初等・中等レベルまでの教育しか受けていない。大学は極めて少なく狭き門となっており、受験勉強が過熱している。

スリランカの労働状況についてみると、女性は農業従事者が最も多い。女性の職業で多いのは、教員のほか紅茶農園などの労働者である。最近では縫製工場の労働者や国外に家事使用人として出稼ぎに行く労働者が増えている。

キーワード：女性，教育，労働，スリランカ，南アジア

Key words : woman, education, labor, Sri Lanka, South Asia

〔1〕 緒言

スリランカはインド洋のインド南端・南東部に位置する人口約2000万人の小国である。インドと同じくイギリスの植民地であったが、1948年に独立した(写真1)。独立当初の国名はセイロン(Ceylon)であったが、1972年に「スリランカ共和国」に、そして、1978年には「スリランカ民主社会主義共和国」と改名して現在に至っている。

国名が民主社会主義共和国であることに関して、古賀はスリランカの伝統・風土的な要因のほか、植民地時代のプランテーション経済が1929年の世界大恐慌により大きな被害を受け、その後の国内での対応による影響が大きかったことを指摘している。すなわち、スリランカでは世界大恐慌の後、貧民救済や保健衛生、義務教育の普及などが重要な課題とされるようになったという¹⁾。

一般的に世界的な社会福祉の発達に関しては、産業社会の発達と近代的な社会福祉の誕生・発達とは相互に関連性があると考えられている。現代社会では先進諸国ほど社会福祉が発達する傾向がある。ところが、スリランカは世界的にみると発展途上国であるにも関わらず、国民の福祉が政策目標として掲げられている。古賀はスリランカを「途上国型福祉国家」と称し、発展途上国の中

では「社会福祉のもっとも進んだ国の一つである。」²⁾と指摘している。



写真1
コロニアル様式の建物
(上 コロンボ
下 ヌワラ・エリヤ
2009)

また、この国では多様な宗教が認められ、男女平等を志向しているが、これは南アジア地域においては非常に驚くべきことである。すなわち、宗教について、この国では仏教徒が約70%を占めているが、ヒンズー教、キリスト教、イスラム教など多様な宗教が信じられている(写真2)。また、南アジア地域は全体的に女性差別が厳

*兵庫教育大学社会・言語教育学系

**鳴門教育大学

平成21年10月22日受理

しいが、スリランカでは男女平等が推進されている。たとえば、世界初の女性首相が誕生したほか、女性問題についての法制度的な対応は、日本より早いどころか、世界的にみても早いことが多い。たとえば、1931年には成人男女の参政権が導入され（日本は1945年）、国連の女性差別撤廃条約を批准したのは1981年である（日本は1985年）³⁾。

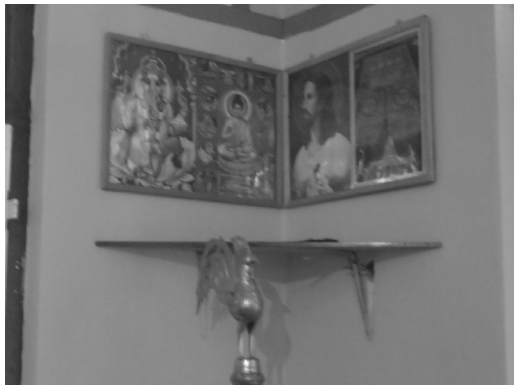


写真2 スリランカでは仏教、ヒンズー教、キリスト教など多様な宗教が信じられている（ヌワラ・エリヤ 2009）

世界的にみると南アジアは最貧国が集中している地域である。21世紀に入ると、人々の厳しい生活状況が問題視され、それを解決することが世界的な規模で大きな目標になっている。このような状況下において、スリランカは他の南アジア諸国よりも女性や教育などについて例外的に良いデータを示し、南アジア諸国について論じる際には「スリランカを除き」と記されていることが多い⁴⁾。

たとえば、[表1]にみるように、南アジア諸国は女性の人口が男性よりも少ない世界的にみると極めて稀有な地域であり、女性の平均寿命は60歳前後である。このような地域において、スリランカでは女性の人口が男性

よりも多い。また、平均寿命も75歳で、この地域の他諸国よりも約10歳も長くなっている。また、教育状況についてみると、南アジアの他の国々では成人識字率は20～40%、初等教育の就学率は60～70%である。それに対して、スリランカでは前者は90%近く、後者は100%となっている。

スリランカのこのような人口や教育に関するデータは、南アジアの周辺諸国が世界的にみると著しく低い状況を考えれば、実に驚くべきことである。

本研究では、このようなスリランカ女性の教育や社会状況について、現地調査に基づき現状と問題点を明らかにする。

〔2〕 調査方法

本研究では現地の大学、関係機関、NGOなどを訪問し資料収集や事情聴取したほか、家庭訪問して聞き取り調査や生活調査を実施した。政府関連の情報は国勢・統計局で入手できるが、女性リサーチセンター（Center of Women's Research, 略称 CENWOR）というNGOは、女性関連のテーマを調査研究するなどの活発な活動をしているので、そこで情報収集や聞き取り調査を実施した（写真3）。



写真3 女性リサーチ・センター(CENWOR)の主要メンバー（コロンボ 2009）

表1 南アジア地域におけるジェンダー差

国	女性の人口 (2000)		平均寿命 (2000)		成人識字率(%) (2000)		初等教育就学率 (1995-1999)	
	人数 (単位:100万)	% (男性100対)	女性	% (男性100対)	女性	男性	女性	% (男性100対)
インド	491	94	63.9	102	45.4	68.4	71	83
パキスタン	66	92	62.6	99	27.9	57.5	62	70
バングラデシュ	63	95	58.2	100	29.9	52.3	70	97
ネパール	12	100	57.2	99	24.0	59.6	63	74
スリランカ	9.5	102	75.4	108	88.6	94.4	100	98
ブータン	1.05	98	62.0	104	30.0	58.0	12	76
モルディブ	0.14	93	68.0	98	96.8	96.6	98	98
南アジア	643	94	63.2	102	42.3	66.0	70	—
開発途上国	2395	97	—	105	64.5	80.3	—	90

Dr W. G. Somaratne, 2005 "Gender and Development (Gad) in South Asia: New Policy and Strategic Options" Sustainable Development Policy Institute (SDPI) 2005 "Sustainable Development: Bridging the Research/Policy Gaps in Southern Contexts" Vol. II. Oxford University Press. pp.395-396 より作成

本研究のための現地調査は岩崎雅美、黒川衣代、服部の3名で、2009年8月24日から9月3日までの期間に実施した。本稿はこの調査結果の一部を、女性の教育や労働に焦点をおいて服部が中心に執筆した。

〔3〕スリランカの教育とジェンダー

1) スリランカの学校・教育の現状

スリランカは識字率も就学率も、南アジア諸国の中では、かなり古い時期から例外的に男女ともに高いことが知られている。[表2]は、南アジア諸国の女子教育について国別に比較した表である。南アジア諸国において、スリランカでは全体的に教育が推進されており、かつジェンダー差がほとんどみられないこと、そして、初等教育レベルの教員の大半は女性で占められていることは、データを一見すれば明らかである。

スリランカの識字率は1946年には62.8%、1963年は76.8%、1992年は86.9%であった。そして、2001年には90.7%、男性92.3%、女性89.2%である⁵⁾。男女別にみると、男性は46年には76.5%で、以後、漸増して現在に至っている。それに対して、女性は46年には46.2%で、男性の2/3に過ぎなかったが、63年には76.8%、92年、86.9%と急速に上昇カーブを描いている⁶⁾。

スリランカでは教育について、1945年に「男女ともひとしく普通教育を受けることができる。」と定められ、憲法には非識字者を完全に根絶するため、すべての国民は教育を受けることが定められている。スリランカの学校制度では、小学校5年、中学校6年、高校2年、そして、大学・大学院がある。そして、小学校と中学校の11

年間は義務教育となっている。この教育期間での就学率は、最近では男女とも約90%である。就学を実際に促進するため、制服や教科書は無償で配布され、子どもたちが自宅から通学できるように学区制度を導入した。また小学生の90%が自宅から2マイル(3.2キロ)以内で通える学校をつくるなど、実にきめ細かな取組みがなされている(写真4)。



写真4 女子小学生の制服姿(コロンボ 2009)

スリランカでは公的な教育は、小学校から大学まで、すべて無料で受けることができる。高等教育における男女比率について、大学生の総数に占める女子の割合は、1942年には10%に過ぎなかったが、1998年には45.7%になり、1999/2000年度には51.7%まで向上した⁷⁾。

2) スリランカの教育上の問題点

スリランカの初等中等教育は南アジア諸国の中では格

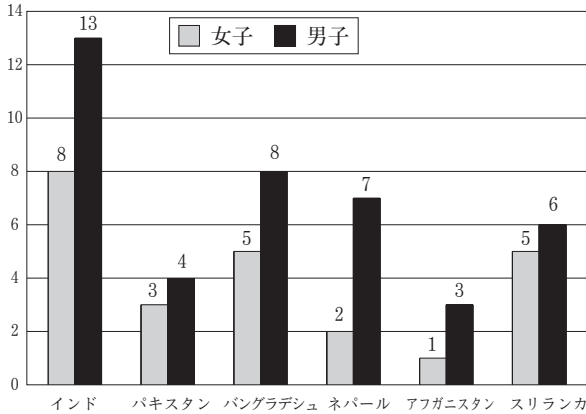
表2 南アジアにおける女子教育の状況

		インド	パキスタン	バングラデシュ	ネパール	スリランカ	ブータン	モルディブ	南アジア
初等教育就学率 (1997)	女	71	62	70	63	100	12	98	70
	男	83	71	80	93	100	14	96	81
	計	77	67	75	78	100	13	97	76
中等教育就学率 (1997)	女	48	17	16	40	79	2	49	41
	男	71	33	27	68	73	7	49	61
	計	60	25	22	55	76	5	49	51
就学率(%) (2000)	女	45.4	27.9	29.9	24	88.6	30	96.8	42.3
	男	68.4	57.5	52.3	59.6	94.4	58	96.6	66
	計	57	43	41	42	92	47	97	54
中退率(%) (1994)	女	41	56	33	48	1	16	6	41
	男	35	46	31	48	2	19	9	35
女性教師の割合 (初等教育における%) 1997-98		36	35	31	22	96	30	94	37
教育費の割合 (公的支出における%) 1995-97		3.2	2.7	2.2	3.2	3.4	4.1	6.4	3.2

Source: 'Human Development in South Asia-2000', Mahbub ul Haq Human Development Centre, (2000).
'Human Development in South Asia-2002', Mahbub ul Haq Human Development Centre, (2003).

Dr W. G. Somaratne 2005 "Gender and Development (GAD) in South Asia: New Policy and Strategic Options" Sustainable Development Policy Institute, UN "Sustainable Development: Bridging the Research/Policy Gaps in Southern Contexts" Vol. 2: Social Policy, Oxford University Press, p.400より作成

別に普及しているが、高等教育についてはそうではない。[図1]のように、高等教育への就学率は、インドは男女で差がみられるがスリランカより高い。他国と比較してもスリランカの高等教育が特に進んでいるわけではない。スリランカにおける教育上の主たる問題点は、高等教育機関が極めて少ないことであると指摘されている⁸⁾。



出所：Key Indicators of Developing Countries, Asian Development Bank(アジア開発銀行), 2004, 2006よりアーナンダ・クマール氏が作成
 アーナンダ・クマール 2006 「スリランカの教育制度の歴史と現状及びその問題点について」『鈴鹿国際大学紀要』第13巻 p.13

図1：南アジア諸国における高等教育の就学率(男女)

スリランカでは、小学校、中学校、高校の各段階の最後に試験が実施される。各試験の合格者でなければ、その上の学校に進学することができない。中卒者の約半分しか高校には進学できないが、進学希望者が近年、急激に増えている。さらにその上の大学進学希望者は多いが、スリランカには現在、大学はわずか15しかない。そのため、試験の合格者でさえ、その大半が大学には入学できない状況が続いている。そこで進学競争、受験勉強が過熱し、子どもの塾通いが一般化している。そこで現在、浮上しているのは、この国で重視されてきた宗教教育と、子どもの受験勉強との両立問題である。すなわち、この国では多様な宗教を認めつつ学校教育では宗教教育が実施されている。また、日曜日の午前中に子どもは宗教学校に通うのが一般的である(写真5~7)。ところが、中学校から高校の段階になると、子どもは受験勉強のため宗教学校に通えなくなる。子どもが宗教学校に通うため、日曜日に塾をなくすか否かが社会的な問題になっているのである。



写真5 家庭や事務所には各室に仏様が祀られている(コロンボ 2009)



写真6 日曜日の宗教学校風景(その1)(キャンディ 2009)

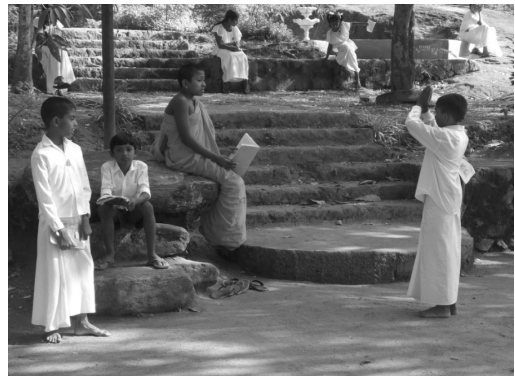


写真7 日曜日の宗教学校風景(その2)(キャンディ 2009)

子どもの教育のため、農村部から良い学校のある都市部の地域に出てくる家庭もある。キャンディ(Kandy)で訪問した家庭では、父親は農村部の自宅で農業をしているが、母親は子どもたちと共に借家で生活し、子どもの世話をしつつ家計補充的に染物の仕事をしていた。学校に通っている子どもたちは、将来は学校の先生などを希望しているという(写真8)。



写真8 子どもの教育のため農村部から出てきた家族
訪問時には父親(左端)も来ていた
(キャンディ 2009)



写真10 ペラデーニア大学人文学部社会学科の講師(左)と教授(右)
(キャンディ 2009)

3) ペラデーニア大学 (University of Peradeniya)

ペラデーニア大学はスリランカで最も古く最大規模を有し、かつ優秀な学生が集まる名門大学である。この大学はスリランカの古都であるキャンディにあり、紅茶畑であったところに1952年に創立された。国名がセイロンであった時代にはセイロン大学 (University of Ceylon) という大学名であったが、国名がスリランカに変更されてからは、ペラデーニア大学と改名された(写真9)。



写真9
ペラデーニア大学の学舎には
スリランカの伝統的建築様式
が採用されている
(キャンディ 2009)

この大学の学生総数は約5000人である。大学には7学部あるが、人文学部 (Faculty of Arts) 社会学科のアマラシリ・ド・シルヴァ (Amarasiri de Silva) 教授ほかに、この大学について伺った(写真10)。人文学部には11学科あり、この学部の学生数は700人である。この学部の中では社会学が最も人気があり、その次は経済学である。社会学科では3年生の段階で、成績が優秀な上位約70人の学生をとっているが、最近では女子学生が90%を占めている。この国では実際に希望した大学に入学でき、さらに希望した専攻に入れるような人は、厳しい競争を勝ち抜いたほんの一握りに過ぎない。それほど進学は厳しい。

スリランカでは正規の大学入学者は極少数の人に限られている。大学進学を希望するが入学できなかった人々の間では、経済的に余裕のある家庭の子どもは外国の大学に私費留学する人もいる。また、専門学校(最近では情報技術の専門学校もある)に行く人もある。それ以外の大学入学を希望する人々に対して、大学ではエクスターナル (External) と呼ばれる土・日曜日みのコースが開かれている。正規の大学入学者には学費は無料であるが、このコースの入学者は学費を支払わなければならない。ペラデーニア大学の場合、このコースの学費は月3,000ルピー(以下、Rsと表す)である。学費は大学により異なっており、月謝が70,000Rsもする大学があるという。ペラデーニア大学では、このコースには正規の学生と同人数の学生が入っている。このコースは4年間通って卒業できるが、正規の学生とは資格が異なる。

4) まとめ

スリランカの教育は小学校から大学まで公教育は無償で保障され、かつ、男女平等で実施されている。しかし、大半の人々は初等・中等レベルまでの教育しか受けていない。大学数は少ないが進学希望者が多いため、極めて狭き門となっており、受験のため塾に通うのが当たり前となっている。大学進学を希望するが正規に入学できなかった人々にはエクスターナルといった補完的な制度がつけられている。

〔4〕スリランカ女性の労働状況

1) 女性労働の概観

スリランカでは国内に産業があまり発達しておらず、植民地時代からのプランテーションによる紅茶、ゴム、ヤシなどの産出物が、依然として主要な輸出物である。都市部には少数の富裕層がいるが、農村部に居住する人々の多くは農業に従事し、人々の生活は概して貧しい。

スリランカ全体の労働についてみると(2002年)、労働力率は男性67.9%、女性33.6%で、女性の労働力率は

男性の約半分である。就業分野についてみると、男性はサービス業が46.7%で最も多く、続いて農林業などが31.8%、産業（industry）が21.5%である。女性は農林業が40.0%で最も多く、サービス業35.7%、産業（industry）24.3%である⁹⁾。

スリランカで女性の多い労働分野は、紅茶などの農園での労働のほか、最近では縫製工場での労働、国外への出稼ぎ労働などが挙げられる。これらの分野に働く女性たちは、いずれも貧しい家庭出身の女性が多い¹⁰⁾。以下では女性の労働状況について、若干の検討をする。

2) 教員について

女性が多い専門的な職業は教員である。最近の教員に女性の占める割合は、小学校・中学校ともに70%、大学教員は約40%である。教員の定年は60歳で、女性が職業を中断することはほとんどない。その背景には、平日の拘束時間は午前7時半から午後1時半まで、そして、一年のうち3ヶ月間は休みであるなど、恵まれた労働条件が大きな要因として挙げられる。そのほか、仕事と子育てとの両立について、子育ては母親の責任といった考え方はうすく、親族などが一緒にみてくれる。また、親族の結びつきは大変、緊密なもので、同居か別居かを問わず日常的に相互に援助しあっている。このような事情が女性の職業継続を可能にしている。日本では女性が仕事を結婚・出産などにより途中でやめる人がいることが、スリランカの人々には不思議がられ、辞める理由を尋ねられるほどであった（写真11）。



写真11 親子二世代の教員家族
(コロンボ 2009)

スリランカでは数年前に教員の給料が2倍になったほか、待遇が大幅に改善され、最近では教員になるのが難しくなっている。すなわち、教員になるには高校卒業時の試験に合格すれば可能な時代や、その上の3年間の専門学校に行けば良い時代もあった。しかし、2007年に大学法が成立し、大学卒業後、教員採用試験に合格しなければ、教員になることができなくなった。教員になった

後も引き続き、土曜日と日曜日には2-3年間、専門学校に行き、Trained Teacherの資格を得ることが期待される。さらに校長先生になるには、一定期間以上の教員経験を経て、教育省の試験に合格しなければならない。このように、スリランカにおいて教員は一生涯、勉強し続けなければならない職業であると考えられている。

3) 国外への出稼ぎ労働者や縫製工場の労働者

スリランカでは国内に働き口があまりないため国外への出稼ぎ労働者が多くいる。このような労働者に女性の占める比率は2000年には全体の67%である。スリランカの国外への出稼ぎ労働者のうち、女性の家事労働者が全体の約半数を占めている¹¹⁾。

このような女子労働者の大半は既婚女性であるが、夫や子どもを残し単身で、主として中東へ2-3年間、働きに出かけるのが一般的である。経済的な理由で出かけ、子育てなどは親族ネットワークでなされるゆえか、残された家庭や子どもをめぐる問題については、あまり問題にされていない。

次に縫製工場の労働者についてみてみる¹²⁾。

スリランカでは経済自由化や最近の経済グローバル化により、自由貿易ゾーン（free trade zone）を定め、外国企業に土地を貸し税金を無料にして輸出向け加工製品を製造する企業を誘致している。日本、中国、韓国、アメリカなどの外国企業が進出している。これらの企業の約80%は既製の縫製で占められ、ここで働く労働者の90%は女性で占められている。企業は24時間体制で、労働者は一日三交代制で働いている。会社の月給は約7,000Rs、さらに残業をすれば約10,000Rsの収入を得ることができる。このような企業で働く女性は、農村部の貧しい家庭の出身者が多いという。スリランカでは成人女性は伝統的なスリランカ式のサリー（キャンディアン・サリーと呼ばれる）を着用している女性が多いが、このような企業で働く女性たちは、日常的にモダンな洋服を着用している。

日本では明治から大正時代の、貧しい農村女性が都会の紡績会社などに働きに出たが、この話と極めて類似しているように思われた。

4) 紅茶プランテーションの労働者

スリランカは紅茶の産地として有名であるが、中部のヌワラ・エリヤ（Nuwara Eliya）という丘陵地帯には紅茶プランテーションが広がっている。プランテーションは最近では国営や民営になってきているが、その労働者は厳しい労働条件下、低賃金で働いている（写真12・13）。



写真12 紅茶プランテーションのタミル族の人々
(ヌワラ・エリヤ 2009)



写真14 A. T. アリヤラトネ氏(サルボダヤ運動の創始者)
(コロンボ 2009)



写真13
紅茶プランテーションで
働く女性
(ヌワラ・エリヤ 2009)



写真15 サルボダヤ本部
(コロンボ 2009)

紅茶・農園の茶摘みの仕事は一日8時間労働であるが、一日、紅茶葉を20キロ以上摘まなければならない。一日の報酬は男女とも同一賃金で290Rsである。一か月間のうち18日以上働かなければならない。プランテーションで働く労働者に対して、現在、賃金を上げ労働条件を改善しようとする論議が進行中であるという。政府は貧しい人々を支援するため、サムルディという経済的な援助(月140Rsを支給する)を実施している。また、小規模事業には金融サービスをし、貧困軽減のプログラムを実施している。スリランカでは貧困や最低賃金の問題が、現在大きな政治的課題となっている¹³⁾。

このような問題に対して、スリランカでは政府の取組みのほか、盛んにさまざまな援助・支援活動がなされている。そのうちのサルボダヤ(Sarvodaya)という非政府組織(NGO)については、コロンボの本部のほか、ヌワラ・エリヤでは現場を訪問した(写真14-16)。このNGOは1958年に創設され、現在、外国の25ヶ国からさまざまな支援を受け、活動はスリランカ全域に及んでいる。スリランカを34地区に分け、200-400人の村単位に組合をつくる形で組織化し援助活動を実施している¹⁴⁾。コロンボにある本部では現在200人働いており、職業訓練センター、乳児院、保育所、障害者施設など、多様できめ細かな取組みをしている。



写真16 サルボダヤの乳児院
(コロンボ 2009)

ヌワラ・エリヤ地区では、組合員は毎年24Rsを支払い、メンバー5人で1グループをつくる。母子保健や飲料水などの援助活動や、夫婦間のもめごとなどの相談にのる家族援助活動などを実施している。紅茶プランテーションで働く労働者は自分たちの食用にする野菜づくりのため必要な資金や技術援助を受けている。この地区で最初に組合員になり3000Rsを借りた男性は、肥料を購入しジャガイモとキャベツをつくっていると話していた(写真17)。



写真17 紅茶プランテーションの労働者家族
(ヌワラ・エリヤ 2009)

[5] スリランカの結婚・家族とジェンダー

この国の家族は一夫一婦制の核家族を基本としており、男性を長とし、女性は家庭を中心に生活することが期待されている。結婚・家族については、多様な宗教が信じられている国であるが、子どもの頃から皆が学校に通い教育を受けているので、宗教の影響は二次的な問題で、そう深刻ではないという。しかし、実際には違う宗教の男女が交際している場合、結婚するのは難しいようである（写真18）。



写真18 スリランカの結婚式
(コロombo 2009)

スリランカでは法的に結婚可能な最低年齢は18歳以上と定められている。実際、女性の平均的な結婚年齢は約18歳であった。しかし、最近では女性の結婚年齢は24-25歳、男性は27歳位である。都市部では男女とも結婚年齢が遅くなり、見合い結婚ではなく恋愛結婚が増える傾向にある。また、結婚しない人が増えている。しかし、この国では女性が結婚しないで生活するのは容易ではない。そして、離婚はきわめて少なく、社会的にも望ましくないと考えられている。子ども数については、1家族に子どもは平均4-5人であったが、最近では2人までと考えられるようになっており、平均1.25人になっている。

スリランカでは「食糧、水、燃料、衛星、住居など、家庭内の基本的ニーズを満たすことは女性の責任とされ、……女性は農業に3~4時間、家事には9~10時間を割いている。」¹⁵⁾が、男性は家庭のことは女性の仕事だとしない傾向があることが指摘されている。この点について尋ねると、スリランカでは家の鍵を女が持ってきた伝統がある。現在も家計管理は女性がするのが一般的で、給料生活者の男性は妻に給料を渡すのが通例であるという。この点については、日本の伝統的な夫婦と類似した印象を持ったが、スリランカの女性は家の外で働かない場合にも、家で何らかのお金を得る仕事をしようとし、とても働き者であると男性たちから聞かされた。スリランカでは1995年の北京女性会議以後、女性の労働の多くがアンパイドワークになっていることが問題にされている。

スリランカにおける結婚の問題点として、前述のペラデーニヤ大学アマラシリ・ド・シルヴァ(Amarasiri de Silva)教授によれば、インドほどではないが、結婚持参金(ダウリー)制度やカースト制度の存在、そして、性モラルが女性に厳しく二重基準であることが指摘されている。

[6] 現状のまとめと問題点

南アジア諸国では世界的にみると著しく貧しい生活状況にあり、識字率や就学率が低いことが問題にされている。特に女子は男子よりも一般的に困難な状況におかれているため、このような状況をいかに改善していくかが、現在、解決すべき課題とされている。スリランカはこのような南アジア諸国の中では例外的に男女とも初等教育を受け、そして、高等教育の進学者は少ないが、そこでの男女比率はほぼ半々である。

スリランカは他の南アジア諸国と同様に、全体的には貧しい途上国であるにも関わらず、国民全体への教育や福祉を底辺から保障しようと試みてきた。その成果が、データにも表れている。スリランカでは教育のほか医療費なども無料である。貧困層の人々も多少でも就学経験があり、貧しい女性たちも出産は病院で無料でしたと語っていた。このような事実は南アジアの周辺諸国では稀有なことである。

このような状況も、最近のグローバル化の進展や貧富差の拡大などにより、より高い教育やより良い医療を求める人々の間では、不満を生じている。

スリランカの教育では、このような量的な問題から一歩進んで、ジェンダー平等を目指した質的な問題点が取り扱われている。すなわち、先生のジェンダー意識やクラス経営の問題、子どもの社会化については、就学前のジェンダーが大きな問題だと意識されている。

スリランカでは現在、教育においては男女平等が実現

しているが、政治参加や意思決定の場への女性の参加がきわめて少ないことが問題にされ、女性リサーチセンターでは「ガラスの天井を越えて」という調査研究報告書が公表されたところである¹⁶⁾。

筆者たちはこれまで南アジア諸国で女性の社会的な状況について現地調査を実施してきた。ほとんどの場合、日本人の私たちとは日常生活の状況が極端に違い、まさに異文化体験の感があった。ところが、スリランカでは女性の生活や社会状況には日本の生活ときわめて類似した印象があり、また、女性の抱える問題点にも共通点があると思われた。

付記

本研究は、「南アジアの女子教育及び女性のライフコースに関する総合的研究」(科研・基盤研究(B)海外学術調査)の一部として実施したものである。

本調査研究を実施するにあたり、大石美佐氏(京都大学大学院)ほかより貴重な資料や情報を提供して頂きました。ここにこれを記し心から御礼を申し上げます。

注

- 1) 古賀正則 1999「社会福祉, 社会開発重視の開発戦略」河合明宣編 『発展途上国の開発戦略』 pp.202-203
- 2) 古賀正則 1999 「社会福祉, 社会開発重視の開発戦略」河合明宣編 『発展途上国の開発戦略』 p.202
- 3) アジア女性交流・研究フォーラム 1995 『スリランカの女性』 アジア女性交流・研究フォーラム
- 4) Dr W. G. Somaratne 2005 “Gender and Development (GAD) in South Asia : New Policy and Strategic Options” Sustainable Development Policy Institute, UN “Sustainable Development: Bridging the Research /Policy Gaps in Southern Contexts” Vol.2: Social Policy Oxford University Press pp.392-408
- 5) Department of Census and Statistics-Sri Lanka 2006 “Millennium Development Goals in Sri Lanka - A Statistical Review: 2006-” Department of Census and Statistics, Ministry of Finance and Planning 2008 “Statistical Pocket Book-2008, Sri Lanka”
- 6) A. J. Satharasinghe 1994 “Women’s Participation in Education and its Impact on Development” Department of Census and Statistics p.16
- 7) 国際協力事業団企画・評価部 平成14年11月 『国別WID情報整備調査—スリランカ—』 p. 7
- 8) スリランカの教育の現状や問題点については、以下のような先行研究がみられる。アーナンダ・クマーラ 2006 「スリランカの教育制度の歴史と現状及びその問題点について」『鈴鹿国際大学紀要』第13巻 pp.1-

19. アーナンダ・クマーラ 2005 「スリランカにおける貧困問題, 若者の失業と教育のかかわりに関する考察—真の解決を求めて」『鈴鹿国際大学紀要』第12巻 pp.19-34。荒川哲郎 1999 「スリランカの教育の現状と課題」『三重大学教育学部研究紀要』第50巻 pp. 115-122。山田千春 2006 「スリランカにおける貧困と教育—教育費への活用を中心としたサムルディ計画の成果と課題—」『教育福祉研究』第12号 pp.11-23。
- 9) Department of Census and Statistics, Sri Lanka “Statistical Pocket Book -2008”
- 10) 辛島昇他 2007 「スリランカ史の展開」 辛島昇編 2007『世界歴史大系 南アジア史3—南アジア—』山川出版社 p.338
- 11) Department of Census and Statistics, Sri Lanka “Statistical Pocket Book -2008” p.39
- 12) 国際協力事業団企画・評価部 平成14年11月 『国別WID情報整備調査 —スリランカ—』 p.13
- 13) Department of Census and Statistics, Sri Lanka 2004 “Poverty: Statistics/Incidents for Sri Lanka”
- 14) 渋谷利雄 1998 「サルウォーダヤとサイババ信仰—仏教運動」杉本良男編 1998 『スリランカ』(暮らしがわかるアジア読本) 河出書房新社 pp.212-220。白石佳菜江「Sarvodaya サルボダヤシュラマダーナ運動 (Lanka Jathika Sarvodaya Shramadana Sangamaya)」(未発表)
- 15) 国際協力事業団企画・評価部 平成14年11月 『国別WID情報整備調査 —スリランカ—』 p.11
- 16) Swarna Jayaweera, Chandra Gunawardena, Indika Edirisinghe 2008 “Beyond the Glass Ceiling: Participation in Decision Making in the Public Domain” Center for Women’s Research(CENWOR)